

自分は、わりとソツなく生きてきた、と彼女は思う。

3人姉妹の真ん中という立場も影響したのかもしれない。

特に誰かに嫌われることもなく、かといって特別に仲のいい友達も作らなかった。それでも常に周囲に人はいたし、彼女自身、現状に不満を感じることもなかった。

小さな頃から、要領が良かった。

大人たちは彼女を良くできたお嬢さんと言って褒めた。

超がつくほどの人見知りの姉と、フランス人形のような外見を持つ妹がいる。

彼女自身には、特にこれといった特徴はない。

なにごととも中の上程度。凡庸という言葉がよく似合う。

きっとこれからもそうなのだろうと、漠然と思っていた。

「ごめんね、図書館に寄っていきたいんだ」

そうやって友達の誘いを断ったのは、何度目か。

そろそろ相手も胡散臭そうな表情をみせるようになってきた。

次はないかもしれない。

そう思いつつも、彼女は、友達に背を向けて歩き出す。

かすかに聞こえてくる、自分に対する批判を、仕方ないと受け止めながら。

(だって、さ……)

言い訳するように、心の中でつぶやいた。

(気づいてしまったんだもの。)

自分がこれまで、少しも満たされていなかったということに。

彼女たちといっても、時間は潰せたけれど、それなりに楽しかったけれど、自分の中に何も残らなかった。いま思い出そうとしても、会話の内容すら思い出せないくらいに。

逆に、不純な動機からはじめた趣味に、はまりつつあった。

世間では、それを勉強というのかもしれない。でも彼女にとって、それはほとんど趣味になりつつあった。

学校帰りに、図書館に寄って、広い机に資料をならべ、新しい知識を学ぶこと。

楽しくて仕方がない。

その代償が、友達を失うことだとしても、いいと思えるほどに。

いままで、ひとりだったことはない。

それは学校だけではなく、ほとんど行きつけになりつつある場所でも同様で。

最近、友好的だった看護婦たちからさえ、目の敵にされているのを、感じずにはいられなかった。

身の置き所がない。

(なんだろう……、ほんとうにわたし、ひとりみたいだ……)

確認するまでもなく、彼女は居心地の悪い環境を、自らの手で作りつつあった。

あれほど世間に溶け込むことに長けていたはずなのに。

人生、どこでどう転ぶかわからないというのは、まったくその通りだ。

しかし、その状況を彼女が悲観していたかという、まったくそんなことはなかった。

むしろ、楽しんでいた。

まだ彼と出会ったばかりの頃、言われた言葉がある。

「君には、意志がないのか。まるで操り人形だな」

嘲弄をたつぷりと込めたその口調を、いまでもはっきり覚えている。

「好きにしろよ。私には関係ない」

そんなふうになんか拒絶できる人がいることを、知らなかった。鮮烈だった。まるで自分と真逆の世界にいる人。そう思った。

なのに、いまはどうだろう。

友達に距離を置かれ、看護婦たちを敵に回してさえ、彼女は自分を貫こうとしている。

少しのためらいもなく。

当時の彼女が聞いたら、驚くというよりも、信じないに違いない。

そんな面倒な環境に身を置くくらいなら、自分の意志など通さない方が賢明なのよ、とでも忠告されるだろうか。

そう思うと、笑いがこみ上げてくるのだ。

いったい何をしているのかと、あなたはどうしちゃったのと、突っ込まずにはいれない。

今の状況に、なにも問題がないと思える自分が、いるからこそ。

「どうせ世の中、なるようにしかならないもの」

自分の思う通りになんて、ならないかもしれないのだ。

だとしたら、何を恐れる必要があるだろう？

好きな気持ちに正直でいること。

それが、今の彼女には、とても自然だった。

「つまりこういうことか」

彼は、笑いを含んだ瞳で、彼女を見た。

「雑魚は引っ込んでろ、と。過激だな」

「物騒なことを言わないで」

彼女はいやあな顔をした。

「だれもそんなこと言ってないよ」

「私に勝てる奴などいない、と言わなかったか」

「一言も」

「顔に書いてある」

反射的に、手の甲で頬を擦る。

「ほら、凶星だろ」

彼は愉快そうに笑んだ。

「あなたが変なこと言うから」

「否定してもいいぜ。本当に違うのなら、ね」

彼女は、言葉を詰まらせる。

「ち、がう。と、思う。そんな自信過剰じゃない」

「手に入ると思うから、その態度を貫けるんだろ」

「……思っていないよ、そんなこと」

視線の先には、手に入らない人がいるのに、どうしてそんなことが思えるだろう。

「けど、結果を恐れて踏み出せないのは、何か違うでしょう？」

その言葉を実証するかのように、彼女は一步、踏み出した。

「その先に、何があるのかなんて、誰にもわからないもの。だからむしろ、飛び出せる」

「ふつうは、恐れるんじゃないのか」

薄青の瞳の中に、わずかな緊張が生まれる。彼はそれを隠すように、視線を伏せた。

「よほど自信がなければ、先へは進めない」

「そうかな？」

彼女は、大きな瞳をクルリと動かす。

「先が見えないって、可能性があるってことじゃないの」

「それでも、進んでみてから、無理なことに気づくことだってある」

「いいじゃない。進まなかったら、わからなかったんだから」

「そこで行き止まりだ」

「新しい道があるよ」

「楽観的だな」

「じゃあ、もし道がなくなっても、いいよ」

わずかに、声のトーンが変わった。

「あなた、誤解してる。わたしは楽観的なんかじゃない。自分の気持ちに従いたいだけ。今の気持ちが大切なの。いままで知らなかったの。こんなふうに自分を動かすくらい強い気持ちなんて。だから絶対に大切にすると決めたの。何が起きても、後悔なんてしないって、決めたの」

「後悔しない、か……」

彼はつぶやくように、その言葉を繰り返した。

髪が頬にこぼれ落ち、それを振り払うように顔をあげる。

目の前に、屈託なく自分を見つめる瞳があった。

そこにあるのは、なんだろう。後悔しないと断言できる、その根底にあるものは。

まるでそれを探すかのように、彼はしばらく彼女を見つめていたが、やがてふっと、視線をゆるめた。

「ああ、なるほどね」

ほとんど聞き取れないような、小さなつぶやきだった。

「なに？」

彼は答える気はないらしく、黙って、彼女を見つめる。

しかも、その時間が、いつにもまして長い。

見たことのない表情だった。

静かなやさしさを湛えて、うっとりとする瞳。

まるで、この世のすべての愛が、そこに詰まっているかのような。

「あの……」

いつまでも見ていたいのはやまやまだったが、心臓にかかる負担が大きすぎた。

彼女はおずおずと、口を開く。

「どうか、した、の？」

それでも彼は、視線を外さなかった。

ただ、つぶやくように、言った。

「おいで」

彼女は、動けなかった。

魅入られる、というのは、こういうことをいうのだろうか。

まるで現実味がない世界。

そんな彼女に、彼はわずかにほほえむと、ゆっくり、手を差し出した。

「手に入れたいのなら、君が来いよ」

その言葉に、はっと我に返った。  
彼女はほとんど反射的に、その手を握った。  
瞬間、強い力を感じた。

「博士？」

らしくないほど強引で、あるいはそれこそが、彼らしさなのかもしれないけれど。

「オレが、欲しいのか」

顔を上げると、そうやってほほえむ彼の瞳にぶつかった。  
やはりそれは、彼らしさなのだ彼女は思った。  
でなければ、これほど傲慢なセリフが、似合うはずがない。

「……それは、わたしが言う台詞よね？」

彼女の言葉に、彼は一瞬、目を見開き、そして、傲然と笑んだ。

「愚問か」

「——というか、」

彼女は、とても嬉しそうな顔で、笑った。

「おなじこと考えてた」

彼はそんな彼女の笑顔を、まぶしそうにみつめた。

きっと彼にはわかっていた。  
その言葉には、真実に限りなく近い嘘が混ざっていることに。  
けれども、それを伝える気はないようだった。  
両手で彼女の頬を挟み込むと、思いのほか柔らかかった。

ゆっくりと距離を縮めた。

息が触れ合うほどに。

彼のまつげはとても長いのだと、ぼんやり彼女は考えた。

そして彼の瞳は、いまはかなしいほど、切ない色をしていた。

だから最後の隙間は、彼女の方から埋めた。

彼女が彼を、抱きしめたかった。